

2010.03
【第3号】



※ふるさとの会のメールマガジンをご愛読いただき、誠にありがとうございます。
今後もふるさとの会の活動内容を定期的に情報発信させていただきたいと存じます。

INDEX

1. 旅館朝日館開設
 2. 全体研修
- 「ホームレス支援における高齢者の皮膚疾患とその対策」
3. シンポジウム
- 「生活困窮者のかかえるメンタルヘルスの問題と支援のあり方」
4. メディアカンファレンス
- 「居住セーフティネットと支援付きの地域社会」
～誰もが住みなれた地域で暮らせるために～

1. 旅館朝日館開設

旅館朝日館は、台東区日本堤の旅館街に位置しており、すぐ近くには「いろは会商店街」や城北労働・福祉センターがあります。かつて日本の高度成長期を支えた多くの建設労働者が今はひっそりとこの地域で生活しています。旅館朝日館は昭和二十年代に建設されそうした建設労働者と歴史をともにしてきました。建物そのものは情緒ある雰囲気を残し、高齢者が生活しやすいように内装を整えて3月にリニューアルオープンしました。旅館朝日館は、2階建てで全室個室となっており、1階は主に介護度が高い方、2階は比較的自立度が高い方が生活されています。定員17名で現在8名が生活し、中には元々この地域で生活されていた方もおり、多くは病院や他の施設等を経てここにたどり着きました。

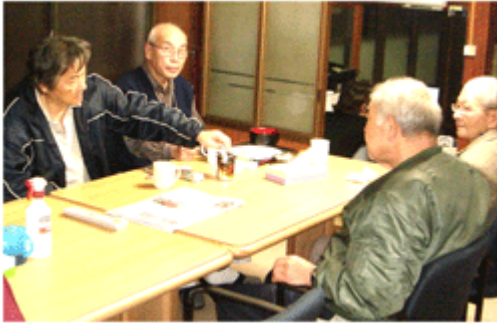
3月に入居された方にお話を伺うと「スタッフの対応も親切で優しいし、すごしやすい。生活のことで色々細かくやってくれるから、自分から小さいことでも手伝ってあげようという気持ちになれる。今後は早く自立してアパートに移りたい。」と元気に話していました。

番頭の千葉さんにお話を伺ってみたところ、「旅館内の雰囲気は落ち着いています。山谷の真ん中にあるので宿泊目当てで訪れる人も少なくない。地域の旅館主の皆さんとも仲良くやっていきたい。そうした地域の特性も活かしつつここで生活している皆さんの生活を支えていければと思う。入居している皆さんの生活を支援することと併せて、そうしたことに一人でも多く携わっていただけるように若年者を中心とした就労訓練の場としても旅館朝日館を活用しています。地域に開けた場としてボランティアの皆さんの協力も得ながらより良い雰囲気にしていきたい」とのコメントがありました。旅館朝日館がいかに地域に溶け込んでいるかが分かります。

当会の施設を利用している方の中にはかつて他の簡易旅館で長期間生活してきた方が少なくありません。その多くは高齢のために単身での生活が継続できず住み慣れたところを離れざるを得なかった方々です。そうした点では旅館朝日館がこの地域で果たす役割は非常に大きいのではないかと自負しています。オープンしてまだ間もないですが、この地域で住み慣れた人が一人でも多く生活し続けられるように生活のお手伝いをしていければと思います。

(崔曙哲)





2.全体研修「ホームレス支援における高齢者の皮膚疾患とその対策」

3月13日、自治医科大学附属さいたま医療センター皮膚科出光俊郎氏を迎え「ホームレス支援における皮膚疾患とその対策」と題した研修を行いました。当会で支援している対象者の中には、皮膚疾患を持っている方が少なくありません。その背景には路上生活などの過酷な環境下での不衛生な生活や食生活の貧困、そして高齢化による抵抗力の低下があると思われます。

疥癬は、疥癬虫(ひぜんダニ)の寄生によっておこる伝染性皮膚病で、かゆみが激しく、指の間、わきの下、陰部など皮膚の柔らかい部分に寄生するといわれています。感染経路については寝具やベッド、こたつ、抱きかかえる介助者などから感染し拡大する恐れもあり、かゆみや、刺された場所によっては疥癬と疑うことが重要で水際で発見することが大事だということでした。疥癬と疑われた場合と診断された時は隔離をし、内服薬、軟膏などの塗布、入浴、衣類や寝具などの消毒。(50度の高温)掃除機での掃除などが有効とされるようです。

シラミ(アタマジラミ、コロモジラミ、毛ジラミ)は、普通の虫さされと同じで、肉眼でも見ることができます。その中で、アタマジラミはふけのように付き、毛ジラミは陰部などの毛の根元にて吸血します。

当会の支援対象者の中で非常に目立つのが白癬ですが、足白癬と爪白癬とを合わせると全国で2450万人の罹患者がいるということです。その感染経路は足白癬患者からの白癬菌散布で、室内環境によって足へ付着するそうです。特に考えられるものは、白癬菌が付着したスリッパ等ですが、湿った足で履くと15分で感染するそうです。乾燥していると感じるもの、菌が付着しても多くの場合発症しないが、多湿、高温、蒸れ、不潔、長靴、ブーツ、足の指がくっついている、白癬菌の量が多い場合は発症するとのこと。また、足白癬は糖尿病患者が感染すると足病変症という合併症を起こすことがあり、PADを伴う糖尿性潰瘍、壊疽は70パーセントと言われています。

路上生活者を経て施設などを利用する場合は、衣類や持ち物は要注意です。看護師や介護者、そして職員は感染の拡大に注意するとともに、皮膚に見られる些細な湿疹などに早期に気付くことが重要です。一旦感染するとひどい痒みなどがあって大変ですが、出光氏によると「それほど心配することはありません。ただの虫ですから」と明るくお話しされていました。

(玉城綾子)





3.シンポジウム「生活困窮者のかかえるメンタルヘルスの問題と支援のあり方」

まだ寒さが残る3月3日、千代田区大手町にあるTKP大手町カンファレンスセンターにおいて、生活困窮者支援のあり方を考えるシンポジウムが開催されました。当日は全国から大勢の方がシンポジウムの傍聴に来ておられ、熱心にメモを取られている姿が多く見られました。

第1部では、「困窮者のかかえるメンタルヘルスの問題について」と題して、久里浜アルコール症センターの森川すいめい氏、市川市福祉事務所の奥田浩二氏、首都大学東京人文科学研究科の岡部卓氏が講演されました。森川氏の講演を聞いていて、生活困窮者のうつ病やアルコール依存症の多さが自殺に結びつかないために、人と人の“つながり”を大切にすることこそわれわれが求められている支援ではないかと感じ取れました。「何も特別な知識を持っていなければならないのではなくて、その人に寄り添って一緒に考えることが大事」ということをおっしゃっていたことに共感しました。日本は先進国の中では自殺率がアメリカの2倍、イギリスの4倍という現実があり、1998年に3万人を超えてからほぼ横ばいとなっています。自殺の要因にうつ病が大きな比重を占めることは知られていますが、困窮者支援を考えたときにもそのことを切り離して考えることは出来なんでしょう。自殺を未然に防ぐためにも、われわれ支援者が日頃から寄り添える支援、何があっても見捨てないという姿勢で接することが求められているのではないのでしょうか。

第2部では、「困窮者支援の基本的視点・提言」と題して、北九州ホームレス支援機構の奥田知志氏、当会グループ水田代表が講演しました。

奥田氏は北九州市におけるホームレスの取り組みや実績を説明した後に、「持続性のある伴走的コーディネート」という表現を用いていたのが印象に残りました。家族的かわり、社会資源との連携の在り方を表現したのですが、奥田氏が困窮者を支援する際の基本概念であると思われまます。

水田代表は、当会のミッションである「地域での安心した生活の実現」を推進するための当会の取り組みや支援のあり方を述べました。当会の支援対象者の多くは「四重苦(高齢、疾病、単身、低所得)」という環境にあり、メンタルヘルスの観点からも日常生活に密着した支援が継続して欠かせないという説明がありました。

支援する場所は違っていても歩むべき方角は一緒であるべきだと感じます。

今後の困窮者支援を考えたときに、支援者と利用者が“つながりのある関係”を築くことはもちろんのこと、支援者と支援者が“つながりのある関係”を築けていけることが求められる時期に来ているのではないのでしょうか。今後のふるさととの会の事業の展開にはさまざまな“つながり”が必要となります。日頃からふるさととの会を支援していただいている皆様には、是非同方向のベクトルに向かって“つながり”を持った支援を賜りたいと思います。

(佐藤 誠)



4.メディアカンファレンス「居住セーフティーネットと支援付きの地域社会」

～ 誰もが住みなれた地域で暮らせるために ～

昨年3月、群馬県の老人施設「静養ホームたまゆら」で火災が発生し、入所者10人が死亡しました。多くのマスメディアがこの事件を取り上げたこともあり、高齢者を取り巻く環境がより一層厳しいものであることが広く認識されました。当会では、この事件が偶発的なものではなく、起こるべくして起こったものであると考え、当事件発生以降多くの方々と話し合いを重ねながらいくつかのプロジェクトを推進してまいりました。そして、事件から一年が経過した今年3月、この一年間をどのように振り返り今後活かしていくのかを関係者及びマスメディアに関わる皆様と考えるとの趣旨からメディアカンファレンスを開催させていただきました。ご参加いただいたのは、報道関係者、医療関係者、研究者等の方々でした。報道関係では、NHK、東京新聞、毎日新聞、キャリアブレン、朝日新聞、共同通信、日本経済新聞、産業経済新聞、TBSの方々に参加され、取材いただきました。

先述の火災では、東京都の福祉事務所が保護した多数の単身要介護高齢者が県外の老人施設等を利用せざるを得ない状況が明るみに出ました。以降、当会では、高齢者がこれまで住み慣れた地域で継続して生活できるための仕組み作りに取り組んできました。特に同火災で犠牲になった方々の多くが墨田区により保護されていたこともあり、火災発生以降墨田区保護課の皆様と協働でいくつかのプロジェクトを行ってきました。

一つ目は、墨田区八広に開設した「ふるさと晃荘」であり、二つ目が同区本所に開設した「ふるさと寿々喜屋ハウス」です。前者は、老朽化したアパートをオーナーが建設費用を負担し民間建設会社が建て直したものです。後者は、オーナー自身が両親の介護に直面した経験から「高齢者が住み慣れた地域でそのまま住めるように」と願い、自宅をご提供いただきました。いずれも当会が一般の物件同様に賃貸料をオーナーに支払い利用しています。市民、民間企業、自治体が協働で既存の社会資源を活用することで地域でより有益な資源を新しく生み出すことができた一つの事例であると考えています。

カンファレンスの前に先の二つの物件を実際にご覧いただきました。寿々喜屋ハウスの家主である鈴木氏や先述の火災を実際に経験した方にもお話を伺う機会もあり、参加者の皆様には当会の活動のイメージを少しお持ちいただけたのではと思います。

参加者からは、各施設の特徴、地域でのサポート体制、既存の福祉施設と「支援付き住宅」の違いなどに質問が集まりました。財源や支援の手法などのテクニカルでかつ具体的な質問が多かったのも印象的ですが、いよいよ具体的な解決が差し迫って求められているのだと強く感じました。また、実際に事業を運営している我われとしても、日ごろの活動をより多くの方々に理解してもらえるような工夫が必要であると今回のカンファレンスに参加して感じました。

(崔曙哲)



発行元: 特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会
〒111-0031 東京都台東区千束4-39-6
TEL: 03-3876-8150 FAX: 03-3876-7950
E-mail: hurusato@d5.dion.ne.jp
HTML: <http://www.d5.dion.ne.jp/~hurusato/>